



笏齋号

俳林良材集

春上

春復秋

八卷之存

~ 5
1257
1





門 5  
12517  
N

雙雀菴冰壺翁撰

# 俳材良材集

春部

二冊

書林

金生堂

五角を造り世むとてたふを  
とて十丈の梁方五尺の柱とある  
舞き松栢を名に角とて総て  
芥子とてきりて法にそふに  
めりて好むる難きとて心とて又  
やうあるとて本とて心とて  
用捨てしとて書に古れとて  
たふ



まことのまことの業なるもの及び其の  
魔を正風のその場を建むと依此  
此れもの業を成すこと申入る良枝  
を撰むるを成すこと申入る良枝  
のそのまを成すこと申入る良枝  
あるものなるものなるものなるもの  
長と成り終るべきを母切のそのま

春序一

自然のまを成すこと申入る良枝  
圓なるものなるものなるものなるもの  
準繩のまを成すこと申入る良枝  
世の棟梁となるものなるものなるもの  
らむことなるものなるものなるもの  
あるものなるものなるものなるもの  
築くことなるものなるものなるもの



此の通りなりを以てし  
書を以てし

安政五年四月 為誰記

申松云

春序二

例言



一 能讀の句集は多しはては題毎に注解を記し書  
婦多しは其且より難書よと云ふ述一題も其  
多し是等事類よ其は細注を入る古人今人其句成  
形も一瞬よ其や其のしむ其を袖書の際  
上は此も其しを撰し一助も其し其しを其し  
の協為其し  
一 序文の注解も其も其は後易き其も其も其け  
其も其も其士のなり其も其も其も其の其



古事類

一 引書ハ増山の井を宗とす其ののハ高師の晩山好士  
 季家ののりをも世紙篇に窺ひし一ハ先ハ季家紙篇  
 能峰山井を由し志のつ一ハのたまひ草のよりの  
 のくハそのつ一ハあり其のハ決書紙のよりの草く  
 一 題名を能林良枝集と號し一ハ少志のり歌及よ  
 歌母良枝集連歌と連集良枝集と有りて世よ名  
 字く行をせ風流よ志のり族ハ此歌号を大のこ  
 一 志のり草のよりの一ハ能林良枝と

唱了字川山由の著一書ハ何れもを也と有り世よ  
 埋せしを標影を唱る毎士々ハ歌きハ何れありぬあり  
 ちをせたるよせたり一ハ里とよしハの編集をよとよしと  
 も新号あり世よ弘めんともよせしと志よより種方  
 のりハ書籍の字んハ博のりハ世ハ秘冊興編を何れ  
 一ハ事ハ何れとせたる世ハ分録再ちのよハ世ハ何れと  
 一ハの多の世とよ免よハ角よハ母初学の為とよ思ひ  
 おあり集よ世ハ此その志連跡を何れとよとよれ  
 一 集ハ種名の傍ハ國名を記し一ハ見易きを宗とよとよれ



物句加入の風子終り返句毎々此を六句一々六二三句の  
 外に餘り終り同名同字の風賢に終り返句を六句一々終り  
 古の字何れも古人の字を初りて

一 撰者の句に加入せざるうりゆりの係を此を題に書きて

他係は高らざるにうり集中の終り五七句をそのまゝ  
 とし尾紙を素りて其の必地を記しあはるゝの也

一 引書に字影名を挙へき例を此に注毎終りてあはるゝ

此の一字を□の中へ記して其のまゝに終りて同名を抄ら  
 ざる上下の二字又下の一字を挙へ余を觀察しあはるゝ

引書目録

書紀	日本書紀	延	延喜式	公	公事根元	和	和名抄
禁	禁秘抄	名	名目抄	主	主水式	湯	御湯殿記
風	風土記	拾	拾苴抄	世	世談問答	歳	日本歳時記
歳	歳時雜記	義	和訓義解	東通	東國通鑑	和	和漢三才圖會
釈	日本釋名	愚	愚見抄	雜	雜談抄	編	編年略
多	多識篇	要	年中故要言	圖	訓蒙圖彙	食	本朝食鑑
令	令義解	塵	梁塵抄	催	催馬樂	真	真名曆
卜	卜部秘說	八	八雲御抄	萬	萬葉集	古	古今集



夫夫木集

堀堀川百首

龜龜山七百首

藏藏玉和歌集

年中行事歌合

職職人盡歌合

賢歌林良哉集

古采古今榮推集

詞詞林采葉集

朗朗詠集

袖袖中抄

異異名分類

奧奧義抄

萍萍の跡

桂桂花抄

藻藻塩草

秘宗祇秘中抄

無長明無名抄

增增山井

滑滑稽雜談

傘御傘

毛毛吹草

年年浪草

篋篋鹽輪

ををたふ紀

細奧の細道

脣風月帖

諧隨齋諧話

糸糸切齒

源源氏物語

伊伊勢物語

狹狹衣

枕枕草紙

徒徒然草

土土佐日記

六十六夜日記

月月令廣義

事事文類聚

律前漢書律曆志

荆荆楚歲時記

嘉古文前集

文文選

尚尚書

羊公羊傳

范盧公范饋飾儀

圓圓機活法

蠶蠶海集

十十節錄

天天寶遺事

大大裁禮

通通風俗通

三三禮義宗

奠尚書大傳

鄭鄭中記

禮禮記

釋秋氏要覽

元元享釈書

報報息經

孟孟蘭孟盆經

形形心静撮

夢夢華錄

法法華新註

埃埃囊抄

提提要錄

本本草綱目

奈大和本草

紫紫塵朗詠

後後天文志

蘓蘓頌圖經

農農政全書

花花彙

羅羅山文集















時香の業	七	田舎猪	七	猪公	六
麦粉	八	梅鱈	九	猪の巢	七
小鮫	九	さくら魚	十	存子香	八
飯太夫	十	蚕	十一	すくすく鮎	九
待国別	十一	神	十二	八十梅貝	十
春御	十二	四	十五	舟玉奈	十一
此後法	十三	大元師法	十六	天物宴	十二
内海義	十四	狸虫	十七	常陸帯	十三
厄神奈	十五	種民好来	十八	字奈の粥	十四
○	十六	初午	十九	あき鳥奈	十五
摩耶奈	十七	本母ち奈	二十	懺法	十六
蘇の徳	十八	二月堂のり	二十一	祇園八幡	十七
松ちん	十九	西の長	二十二	遺教経	十八
奈宗ちん	二十	天全ちん	二十三	さう担担	十九
奈口奈	二十一	○	二十四	少聖の忌日	二十
	二十二		二十五	己の日の辰	二十一
	二十三		二十六		二十二
	二十四		二十七		二十三
	二十五		二十八		二十四
	二十六		二十九		二十五
	二十七		三十		二十六
	二十八		三十一		二十七
	二十九				二十八
	三十				二十九
	三十一				三十

五形	廿一	母子舟	廿一	五加木	廿一
茶つ	廿二	奈茶	廿二	眉作	廿二
重風	廿三	仙臺奈	廿三	若菜の舟	廿三
梅子	廿四	奈席杖	廿四	市ちん	廿四
三月大根	廿五	青麦	廿五		廿五
生	廿六	生	廿六	白魚	廿六
椒魚	廿七	廿八	廿七	何きり	廿七
蜆	廿八	妻の餅	廿八	○	廿八
鷹	廿九	奈の巢	廿九	奈の古巢	廿九
鷹	三十	酒のり	三十	内房	三十
乙香	三十一	奈交	三十一	響	三十一
引つ	三十二	果ち	三十二	ね花奈	三十二
奈香	三十三	果ち	三十三	梅の巢	三十三
奈香	三十四	果ち	三十四	比虫出	三十四
奈香	三十五	果ち	三十五	徳子魚	三十五
奈香	三十六	果ち	三十六		三十六
奈香	三十七	果ち	三十七		三十七
奈香	三十八	果ち	三十八		三十八
奈香	三十九	果ち	三十九		三十九
奈香	四十	果ち	四十		四十
奈香	四十一	果ち	四十一		四十一
奈香	四十二	果ち	四十二		四十二
奈香	四十三	果ち	四十三		四十三
奈香	四十四	果ち	四十四		四十四
奈香	四十五	果ち	四十五		四十五
奈香	四十六	果ち	四十六		四十六
奈香	四十七	果ち	四十七		四十七
奈香	四十八	果ち	四十八		四十八
奈香	四十九	果ち	四十九		四十九
奈香	五十	果ち	五十		五十











花の春

雪ふるは長春六せのしと花の春

ムツ 初代め

人は富む地は位をせり是の春

エト 儂月

初空

初鳥へぞ一歩を獅子の天宮うけ

古 一茶

その空はりの出るまへの衣とあめ

祖 銀

日の始

逢ふ人し跡をみよむや日の始

下サ 旭 翁

初日影

海を穿て氷るみ何うぞ初日影

古 万 古

初手水

望のれあらきよきみや初手水

下サ 月 杵

船のりもまじしむら井や初手水

菅 鷹

歳旦

雪の何る門さへ年の何れも歳

ムツ 俄 友

初鶏

初鶏や妙は雨あつ初鶏のうら

末 足

その朝の朝と坂みえりふら水

多代女

初鳥

里々を初鳥の志やはら初鳥

系 有 翁

花をのちるはあつ初鳥

聖 鶴

あつ初鳥の志やはら初鳥

系 昇 左

四方拜

〔公〕元朝からの時よへき属星を唱へ天地四方 山後城

星を唱

よや中起り人王三十九代皇極帝雨の所行は和州南洲の河上よ

星佛

在家の世俗星仏とてあつ初鳥の志やはら初鳥

唱ふるあつ初鳥の志やはら初鳥



齒固

こちひのこちひの大根根も・ゆり葉・苺葉・おやこ子  
人齒をこちひ命をこちひ命の字取をこちひ命をこちひ命

齒のこめよちひ命の賜りなり

信子

讓葉

ゆり葉や一枚も物より

世負

齒朶

桐の齒朶天のうららとやへう

古鳳朗

鏡餅

鏡をち母死に於て父あや

古曉臺

うみ餅を煮て焼くぬ尾の桐

公眠

裏白

うら白やあやの葉の源山州

西馬

御藥供

増・菓子・唐蘇・白散・慶嶺菜

天皇の御薬をこちひ命に奉るは菓子とて小女をこちひ命

磨藕

日の光うらやまをこちひ命に奉るは菓子とて小女をこちひ命

古万古

あやの葉の源山州

古信子

椒拍酒・柶酒・柶觴

あやの葉の源山州の事

朝賀

増・朝拜・奏賀・奏瑞・小朝拜・朝賀朝賀

を唱ふるは朝賀の事也。朝拜ハ元日辰の刻は天皇  
大庭殿は行幸ありて朝賀をせむは朝賀の事也。奏賀奏瑞ハ去年  
のめでたき事瑞の事也。成國より中世の事を言ふ。朝賀ハ元日

元日郎會

諸司奏・七曜曆・冰様・版赤

國柶奏・國柶笛



七曜御曆

日月水火木金土の七曜をまじりたる

氷 様

去年氷室よきをあらたむ氷の厚薄を奏し

腹 赤

腹赤の贅ハ鯨といふ魚をまじりて中流にまじりて

て元日御會の序よりあり也

國 栖 奏

必栖笛を吹し行幸の時必栖人ありて一夜酒をまじり

國栖くとも花の御の奏

古 擗 堂

院 拜 禮

一日院系の人々院の御礼拾よりあり

祇園削懸の神事

元朝とらの一天は祇園の御殿よりおのりおのり

為し用ゆるりあり一説大味らとらひておのりあり・按まらるる今

まらるる

まらるる日よらへりけりぬきつる里かけ

由 誓

歳徳の神・元方 柵

婆利塞女の神を元方と説ひてありみ

治とく、元方よりありける神社へ

元 方

柵より眼をけつてむのふ元方哉

下 丹 分 炭

心何よりありて嬉しき元方あり

等 葉

毘沙門功德經

むのハ元朝とらの時よ

若 夷

【箋】是江戶より梅神 双をまじりて元日夷の像を画する

今ハ跪

鳴るるのやき神あり世をまじりての夷

古 奈 堂



夷廻きりぎりす 大黒舞大黒舞 芳名

夷廻・大黒舞 民間の門をさうかひ舞を嘉徳長今江戸  
吉原をさうかひ舞の法余風也

春駒はるこま 大黒舞大黒舞 水壺

春駒 夷の舞は馬をつらうて踊はしき舞ふは是れ春駒  
と名つゆや都鄙ともいへり此を禁中より四月七日白  
馬を夷境のよりいり此を  
下より舞て志をこころあや

鳥追とりお 春駒はるこま 古太極

鳥追 笠を鳥帛を以て面を覆ひて踊るは此の法也  
民間の門ともいふは此をさうかひ舞と云り元田中もいふを述べて  
拂ふの舞より出るものあり附て云今江戸より女乞食の舞を述べて  
三弦を弾き此をさうかひ舞といふは此の中より也

傀儡師くわいごし 鳥追とりお 古一具

傀儡師 夷廻の多かり其名無  
さるるふとてい出さ

猿引さるひき 傀儡師くわいごし 其角

猿引 猿を舞はしめ鹿の枝をさきさきりあり是馬撫神と  
いふ神をまつるをさうかひ舞といふ

狙廻すまわ 猿引さるひき 古太極

狙廻 狙を舞はしめ鹿の枝をさきさきりあり是馬撫神と  
いふ神をまつるをさうかひ舞といふ

猿引さるひき 狙廻すまわ 波路

狙廻すまわ 猿引さるひき 梅泉

猿引さるひき 狙廻すまわ 春山

狙廻すまわ 猿引さるひき 琴堂

上毛



門の神棚

在家の妻戸より棚をこぎへて神を遷り夜に  
かえりけし舟を備へたるあり

神の灯や門下の見えおの棚飾り

世貞

門松

・たて松・かきり松・のきり松・大かきり・かきり松  
胡且將來う塚のまじりてをまじりてふと何世と(世)よれり子年  
をちきり仲八方世成契る・女のふせ六年始の終ひよ  
用より一糸禪園の正統仰き侍りき也

月空の為りも志ある門の松

古 去來

門松やそ留まるときの玄冥お

古 柳悦

おの松やえあるま所の子松島

古 篠島

炭たもしく米俵まじりかきりうれ

ヒカチ 正 徳

餅竹

門餅

餅の形を雪のあきく門餅

春 湖

藤末のゆいといつまじり

斜 禱

松餅

園の松のきりあり松中しき

古 俣島

餅海老

餅海老親けりし世のむつり

古 乙 良

掛鯛

は鯛の月形白く和羹しく食へば温疫痢病をふくの  
邪薬を辟る

懸鯛や歯のきかきり首奈ののち

古 大 翠

のち鯛や山のまじりも取のちせ

芳 子

橙

代に赤たると呼ぶ赤橘  
の葉と花



若水

ついでに井をきき・井の水  
・水桶

汲つて井の水をきき・汲り

名一 汲

汲あつても清き水のたぎり

山子

井開

井をきき・水をきき

水壺

大ぬく

元日は大ぬくはたての茶を大ぬくと云ふは用をきき  
骨大ぬくといふは古語なりといふもいふへいぶすといふ  
文字何れにせむ  
方より也

若餅

三ヶ日の内はつきたるをもちを  
雑煮とて用ゐる

雑煮

煮をもちや根の煮もきき・ゆめと云ふ

拙織

この餅は形もふ違ふ茶の煮もきき

水壺

雑煮

かんきいそふ・いもの・むきいそふ・いそふ・いそふ・いそふ  
いそふ・いそふ・いそふ・いそふ・いそふ・いそふ

上下のつけをきき・雑煮の水

名山

雑煮の水

魚藻

煮をきき・雑煮の水

九起

芋の煮

芋の煮を云ふは煮をききといふも花徳あり  
いそふの煮をきき・煮をきき

煮をきき・芋の煮

意雅

名月と堀の煮をきき・芋の煮

系文海











俵子

生海草を  
いり

喰積よまなむ積古あつらう水  
くむつをいりまなむ積古あつらう水  
味 山  
味 我

押鮎

鮎の幸魚をくまの鮎を用ゑ魚を(五)よも元日の  
変よもえり

押鮎や若もくまの鮎を用ゑ魚を(五)よも元日の  
花月

お鮎や猪口よもあつらうのくまの鮎  
花園

鏡草

正月一日大内よもくまの鮎を用ゑ魚を(五)よも元日の  
変よもえり

寶船

たのしむ船をくまの鮎を用ゑ魚を(五)よも元日の  
変よもえり

赤國の寶のくまの鮎を用ゑ魚を(五)よも元日の  
花月

頂上の名の寶のくまの鮎を用ゑ魚を(五)よも元日の  
花月

鏡よ宝船はくまの鮎を用ゑ魚を(五)よも元日の  
花月

年男

二日よもくまの鮎を用ゑ魚を(五)よも元日の  
花月

庭寵

空の陣をくまの鮎を用ゑ魚を(五)よも元日の  
花月

庭寵ちくまの鮎を用ゑ魚を(五)よも元日の  
花月

福藁

福藁ちくまの鮎を用ゑ魚を(五)よも元日の  
花月

福藁ちくまの鮎を用ゑ魚を(五)よも元日の  
花月















宵の年・若き年

去年  
今年

みくことし 秋をそま世し留る水

四端

神の燈のほまり枝こそまきく

響空

今年

引ぬの静ふりつる水

古木葉

ゆき天よさくしの影や 春 雪

雪笛

古年

ふる年の厚まよまきる水

龜水

菜大根やふる年よりの新じ物

氷壺

春若し

春若し 歸るまきりもまえぬ

乙郎

筆試・試毫

書初

書初の融よりくまよ

古道彦

かきめや水よ柳の芽あはる

花重女

吉書

とくみ向ふまきり玉の吉書

抱蓋

まきる初春の河る吉かみ

甘菜

筆始

の初まきりや草をいぬ

不係

旅の記の二の巻出でて草始

出詞 接泉

三益の酒花ちのうや草は先

文起

吹初

管・笛の初あり 舞初 樂の始也

彈初

まきりまきりや耳おはるのまきり下てけし

氷壺



謡初

彈きめや左まうあはる辰隈変

位首

松風もまゝに夜あけのきよは謡ひ初

古成美

むくろよえ方のつらうむしめ

古常晴

松籬子

縁神のいさめはしえや松を流

世負

松を舟に子孫の遺りゆきしりぬ

波路

千壽萬歳

年大和國窪田若尾村の雨空の

萬歳

年今の世の萬歳は或説は大江定基博學大夫の佛道  
ももうよかぬ人よそ中月の説は目出度うふりうり  
ふ知りの百性よをく佛は東漸のきを吹かせるのまうめり世  
りりを忘るし様せり今の世は弘里一に何万歳もをあり・出  
羽園をうりし様多しもの上下を若門よはた  
若旅を吹るあそびも万歳よはふり・ぬり

萬歳やとくし能舟を東より

山溪高

万歳の歌よすくをの朝日のぬ

茶曉

茶やや松をまよふ身の如き

山子

雨漏をまよふ万歳をり

茶瓢

御降

滑早まよふ  
言雨をり

雨降をりまよふ景をや畑の春

古木葉

御降やまよふ一日をり

古而后

あそびや馬もむしやのむし

帰風

は降や遊むの種をり

舟潮月



御降や氷の上より五草あり 冬 逸洞

稻積 正月の病起を

移つむよ不眠あらや老う癖 秋 御風

つよはむやまきく病をよ治して 冬 五後

稻積や日暮し憂ふ事や 冬 司水

初商・買初・初店卸・帳綴

初市 初市や初より起るのえ世なり 水壺

もつ市や憂ひ出さ家あり 願席

初賣 初賣やまゝ寝ぬ先は初考 天 松

初荷 初葉つる馬のしる事初荷なり 控巻

舟移りし中へのいさきも初荷なり 冬 可月

郎振舞 水まきの初音はまきなり 芳子

春木 夕暮の具はまきなり 皮袴

玉敷内 流嬉しあはれは初め イッ 来久

郎小袖 恙なく初をなすは初小袖 甘茶

初芝居 人息は初をなすは初芝居 波路

雨は君し初は初芝居 冬 素月

松の内 中への雨は初の内 下 羽人



春永 春永のつらきをいふ 純走の 水臺  
 注連の内 注連の内 閑雅  
 懸相文 陰陽師赤き布衣を着て白布を以て面を隠し居りて  
 時より糸所の町をさうりしきりし  
 世負

水祝 滑 初喜舞水をいふふりあり附云婚姻人の大禮あり  
 水を停せしめし降園他は後日本書中云くおやまける  
 交水 下サ

舟玉祭 簀 元日舟よれ勝りて中津を渡るあり  
 古 白 雄

幸木 サイハヒキ 幸篋・藁盒子・幸木ハか申扶の類あり此國より幸木と  
 出 双 岳











磯菜摘

まきのふわわ〜風や磯菜摘

由岐雄

蘿蔔

まじし海やま〜まじし海

素月

福涌

滑和徳七とまの如田を修〜云是福

引り

引りあひつり〜福引とて餅を二人〜

いり

黒小神黄埃りして福〜

初寅忝

初寅忝・畚卸 上のらら日新馬よ〜

いり

いり二番〜

初寅や院〜雪あをり

月居

初寅や院〜雪あをり

光席

畚卸

換投も実〜や畚おろ〜

秋田 換水

まろ人〜や畚おろ〜

初卯

年初卯の日住吉神社は詣〜

札〜今世に戸を龍戸天満宮社内〜

出せ〜日初卯〜

愛宕寺天狗宴

二日強持よきを

卯杖

公卯杖・卯杖正月上の卯杖〜

源卯杖〜卯杖〜卯杖〜卯杖〜



いふあはれをてんる  
以上増

二宮大饗

ニクウダイキヤウ

二日あり二宮と公東宮中宮の御子之王服以下二宮よりあり  
三夜程より饗まつりあり

朝覲行幸

テウキヤウ

二日あり赤坂ハ天子の年略ハ上皇兼母后の宮へ行幸あり  
事なり 公朝覲の字禮よりあり

臨時客

中あり  
御

探影を無よ更さや臨時客 結之  
降らせしき雪ハ流氷を臨時客 芳州

ふも雪を無よ也居り里ん 一宮 仙月

三ケ日

二ケ日よりあり 芳州 峰ハ月 梅笠

思ふよりありハ一宮 二ケ日 一宮

けしき日よありやふくしき三ケ日 西山

芳州の 免之えさるぬ三ケ日 木島

高うやえ

増

十瘡系病膏元日の清葉ハ三ケ日あり 一宮

若指ハつ帯ハ清葉系病膏のうらよ付らるるを 公

延ハハ子瘡万病膏

御慶

改年の御慶  
あり

古 曉臺

空を志るよしあくは茶うれ 水臺



履端之慶

元日よ人を契  
まのあはれあり

覆新之慶

あせの正且よ書を  
人を契するあり

叙位

五日或六日法后の年芳を奉  
次子よ叙するあり

白馬郎會

七日何をむすの  
せち

御弓奏

名註 西月七日の節會白馬節會と云は是よ何るの夕夕ラレハ  
夕夕ラレノ畧訓の如琴のさくさく人々と云其奉味昔ハ弓六弦を  
あへて和琴と云ふはハタナラレの畧なり  
壹井義和ヤサキ

七日正月

増 今の世はハタナラレを子の日として茶菜美を用ひ侍るあり  
前歲より正月七日は七種の菓を美くしてはハ人万病は  
えへ  
まや

人日

七日あり一日を猪と云ふ二日を狗と云ふ三日を豕四日羊五日牛  
六日馬七日を人と云ふなり

人の日也世よまのあはれなり夜うれ 為山

はるあはれ先人の日也まのあはれ 三光

あまの日也あまのあはれなり 山子

人の日也人のあはれなり 仙月

人此日也人此日なり 志孝

靈辰

七日あり 菜摘川神事 七日志徳縁手の  
芳云ぬり

御齋會

八日六極殿の御齋會十四日迄七日迄  
あまの祈りあり

真言院御修法

八日宿直人(随)あまのあはれなり七日のあはれなり今年  
を別界あまのあはれなり明年ハ胎養界なりよこのあはれなり



傳せしむる後七日の正修法云々此の事

真言院ハ中ノ事ナリ

### 大元師法

師の字をいふ事アリ例ニ

### 女叙位

公 八日女之位階を叙せしむる事アリ内侍司の被官ニ

ありおせハ三つ子を用ひらるる事アリ三つ子ハ天子のちりあり皇孫ニ

傳ふ事あり毎年ヤ文を出して五位のちりあるをたす事あり

### 女王祿を賜

女ウロクの字を讀云云増八日參議并史官と承明門の内

### 常陸帶神事

十日常陸國菟高の神の祭の日女帝さう人阿ま

きつ則ち常のぬいの男と親しくある事あり

このくま子いつう捕は出で常陸常

芳州

思ふ事書も神もや常陸常

藁雅

文字さきハ何を新ひよ常陸常

鳳眠

かいはしきなりや常陸常

有隣

### 夷祭

十日西のまきなり今日大坂今案の社よも人

あさきや十日夷のさきなり

某史

板部へ十日夷より常陸

雙岳

恙をりぬ十日夷のさきなり

氷臺

### 縣呂の除目

増 十一日あり十三日迄三日と云々縣田舎の事あり

外國の人をめぐりて任官をさる事あり

つぎの事あり法も文を任せしむる事あり



御齋會の内論儀 十四日は夜あり・あつたきり・かきりのこと・踏歌の十

御齋會の内論儀 十四日は夜あり・あつたきり・かきりのこと・踏歌の十

御齋會の内論儀 十四日は夜あり・あつたきり・かきりのこと・踏歌の十

男踏歌 十四日は夜あり・あつたきり・かきりのこと・踏歌の十

きさきのをめぐりて夜廻をうらむ世を

ゆい・咲ぬ花や踏歌の年よ夢

何れも見るまじりもふある踏歌うめ

ゆい・やうふさ夢まじりや踏歌宴

三球お

増同左義長・爆竹・みまをんと・吉書何くる・即

お花より中へ焼くくるを云り 徒 一よきえり法成院の沈み

爆竹

左義長よ都の空に夜鳴き

左義長よ都の空に夜鳴き

雨のつらき雪ののちなるらんやうめ

旅人をまじりてささく爆竹

あやう先やうらむのよせん

林田 志山

古夢大

由 哲言

拙 誠

有 隣

下 廿

下 未

下 未

下 未

下 未

下 未

下 未

下 未

下 未

下 未







つひに後の方より蘇州を養志大方近衛の管領蘇州より果て後  
大お射子に後をよぶお世をさうりつりつりといふあり

賄ふは鼻志ろめりや酒きりひ 下り分賞

結弓は志ろめりや中々を志 系

### 數入

十六日主人持たる人暇を乞う古の神り父母兄弟親類  
よ芳面しつり遊ぶあり

數入やせつりつりつりら 古其

やふ入や日つりつり 古男

數入やせつり 古池

### 厄神祭

十九日・蕪民将来 お世の儀の厄神の宮へ蕪民お世  
の礼を求るつりつり神代より

王蕪民の情を得しめて汝の子孫永く災難を免るつりつり  
よふら蕪民お世の子孫に云れをの事もつりつり

蕪民お世 後 甘菜

### 具足の鏡割

二十日今廿一日具足のをちを

### 廿日團子

世傳今日を廿日  
西月つりつり

西月も廿日よありて 蕪民の形 古

### 煎餅を繋系・天穿

テシセシ こころをいね東の信西月廿日おの事よて煮餅  
を繋系屋の上におくはを天せん云つり

### 伊都岐島祭

下の夷の日官祭 下り 吉田清枝 十九日

### 内宴

廿日仁壽殿よりつりつり文人影をよむつりつり

### 外記の政始

廿日おの事よ外紀の恒例臨時の政をとりつり

### 御忌

廿五日法橋上人の忌日よ十九日より廿五日まで お恩徳よ



福壽之き

出支後の年よ六ちのり正忌の詩  
人あまよそれと志せりや御忌指

元日  
とらり  
春  
而  
后  
漁  
澤  
惺  
惺  
有  
麻  
大  
板  
赤  
屋  
下  
十  
條

東風

俗へ来たる雀のこゝに福壽州  
咲つゝく波中もそえやそく壽之き  
氣さへふそく通る福壽州  
却もそくそくおれや福壽子  
若もそく何せしつそくそく壽州  
産石の若もそくそくそく東風

春  
而  
后  
漁  
澤  
惺  
惺  
有  
麻  
大  
板  
赤  
屋  
下  
十  
條

氷流

物東風やそくそくそくぬれり  
物東風やそくそくそくぬれり  
何のそくそくそくそく氷のそくそくそく

春  
圃  
由  
之

氷浮

毎中そくそくそくそくそくそくそく  
そくそくそくそくそくそくそくそく

春  
圃  
由  
之

凍解

氷のそくそくそくそくそくそくそく  
氷のそくそくそくそくそくそくそく

春  
圃  
由  
之

氷のそくそくそくそくそくそくそく



凍と雪を草より汲るを清氷也

氷きくけりしとれは何をそり 古 雨塘

風の多く氷はたてるおぼろ 古 幻水

残氷・氷のひま・魚氷よのなる 月三毒の五日の候なり

雪解 畑中やま草掃ぶ雪よける 古 山方

雪よけるま草の凍くつおぼろ 古 藁屋

雪よけるしうまをひく雪よける 古 梅笠

雪間 雪のまき物まのりく雪よける 古 五反

蒸やうしうゆる鏡山の空間也 古 梅笠

春二十七

残雪 消残る雪よの遊ぶまのり 古 七朗

井やましうまをひく雪よける 古 不深

雪解水 山の北雪よの水よまのり 古 氷壺

雪消 雪消るまのりや雪よつく山の雪 古 樹石

雪の絶間 氷のめくや雪の絶間の雪の峰 古 佳音

雪霏 雪しうまをひく雪よのり 古 氷壺

雪よるれ 温石の雪よるれ 古 松亭

旅人も折のらまを雪よるれ 古 蘇史



泡雪

若柳の雪の初まきのまゝや雪あふれ

水壺

淡雪や陣をまのりもはらうたれ

古 糸 景

淡雪や消つてくもふふふ

指 山

淡雪や細き江戸のまをせよ

為 山

淡雪のまのりもめぐる底うらみ

香 芸

春の雪

あまの粧ふまをやまの雪

遠 杜 水

粧のゆらぐくさやまの雪

見 外

雪忘る

雨水の節 正月の中

瀬魚を  
祭る

祭る 瀬のまを祭りし魚を推す本

出 御 風

木の芽

寐忘るるの所を木の芽もく

、 梅 水

まのんつゝはるのまの木のめうれ

古 露 活 子

下 崩

雪の戸や狗子村もをえ出る

古 乙 二

意猫の喚びをうめる磯の雪

古 成 美

鶯菜

鶯の鳴飛は貝刻  
生る小菜あり

雪の寒のあつて雪

水 壺

水入菜

年 法の近郊畦の雪を水を流しては雪  
まをる水入菜ははるあり

是れはの市のやうなり水入菜

水 壺











柳

窈窕未難木藪あり柳の影 越后 扇守  
 うめ折る花活るくまを枝えり ある 何やを  
 梅咲や蝶舞 伐と藪の中 ムサシ 里玉  
 木の下結雪はうあをさうり東の影 下元 我  
 月と梅いよく春の帯きく礼 多子 作紫  
 時とくや凍る海ぬまよりあ結衣 多子 飛  
・青柳・青やあき・川菘・風見竹・川をい柳・玉柳  
 ・川をい草・まより菘・門の菘・芽をう柳・あぶ菘  
 引よせそを柳うめり柳うめり 古 大草

氷魚うろも居る青柳の世と海 古 寥招  
 菴の名くありそくも菘う礼 祐之  
 水うろく影善結るやあ菘菘 樂山  
 花もあき菘や人のそをうあ 五子 衣儀  
 板よりうろ影のうろあ柳うめり カサシ 文志  
 一まもろも柳うあ枝あき菘う礼 木箱  
 活るうろくうろあ柳の目い 香芸  
 立あらうふあああものあぬ菘一菘 サカミ 布太  
 物うあもあき居ありの柳うあ 薫燧











水温

花咲く木は春を告げし山は雪の  
水陰の石よおちつくぬきこりれ  
御風

山

朝のふりそく氷をえしよふぬきむ  
一鶴

長閑

長閑きや鳴ぬ子鳥のこゑを  
下十條

暖

寐あたらや宵の春菜をるの春  
庭彦

麗

河のよあはるや夜あはるの月影  
波靜

所返

麗よ清ふこのよふ葉この柳  
古末葉

所返

うららかなやんのお花樹をあり  
氷壺

所返

神鳴りやせむむる雪の河のく  
古去来

山樹の丸

日のうちやあらくまきそ河返る  
山梅月

凍返

霧あ雨のよりそくそくそく  
末精

餘寒

脊戸細や梅はちりたよ春の  
甘菜

春寒

春の戸は古城のまをぬ余寒は  
甘志

春寒

挿く葉よ付てのひつく余寒は  
嵐夕

春寒

積れよあまき小庭の余寒うそ  
瓢箪

春寒

春のよと空に樹のよを春  
出陣 風

春寒

申すむきよよまやまの春のよと  
ふ年

春寒

ゆきよよふも春の空をうら  
古林六



松の花

・神皇正統記  
・十三年の歌

松のそとちよや小袖の着るそり

古 蓬流

そりよの雪のころもやよりの花

十三 梶左

若松

若松やあつめうらなふ

水 壺

春鶯囀

・梅うらなふ  
・子日衣

・梅のそと  
・雪衣  
・雪衣  
・雪衣

葩煎

表仲郎の侍集よ云 播磨を 釜中よ煎るまをを字書  
名つてまへに日星を 煮り蓬菜を煮よと書く  
ハ白皮を  
用ひあり

ハ白皮を  
用ひあり

口よ何ふ葩煎のころもや海の後

水 壺

山柵の皮

辛皮と云ふ

百千鳥

増八

百千鳥の歌を云ふ 藤原の歌 藤原の歌 藤原の歌

藤原の歌 藤原の歌 藤原の歌

春の宮

春の宮の歌の

・霞の洞

初霞

初霞の歌の

尋 鳥

舟つきの舟よ南より

生 契

舟の舟果は初霞の歌の

未 有 鳥

舟の舟果は初霞の歌の

イセ 五 鈴

舟の舟果は初霞の歌の

越 祖







遅き日

暮遅き日 田の暮とて 舟の子後

翁

暮遅き日 田の暮とて 舟の子後

上井 由儀

舟の暮とて 舟の子後

美城

春雨

舟の暮とて 舟の子後

秋之雄

舟の暮とて 舟の子後

上毛 心星

春風

舟の暮とて 舟の子後

西馬

春の暮

舟の暮とて 舟の子後

田久

舟の暮とて 舟の子後

貞史

風光

舟の暮とて 舟の子後

漁藻

春の水

舟の暮とて 舟の子後

尋美

舟の暮とて 舟の子後

清水

舟の暮とて 舟の子後

智秋

海苔

舟の暮とて 舟の子後

龍騎

舟の暮とて 舟の子後

雨村

舟の暮とて 舟の子後

石月

舟の暮とて 舟の子後

樹石

海雲

舟の暮とて 舟の子後

樹石

現

舟の暮とて 舟の子後

樹石



蛤	蛤やうみの手扱をきり荷心	帰風
浅利	象のうらよ扱のをを捌と里	古白燈
鱒	鯛鯉のうへまをきり荷の光りうら	葉雅
	陸つぎのあきくうらの鱒	波踏
青鰻	庖丁の光りうら荷の鱒	拙誠
若和布	青鰻や敷合せうらき白じりの	葉雅
鹿尾藻	和布を刈色きりむらうらきうら	古葉雅
鮎鱈・初鮎・干鱈・目刺	舟獲の徳よのきりしりきり	古葉雅

月

初月・二見月・三見月・仲春・夾鐘・如月・令月  
 陽中・正月のののありしと正月さえりて衣を更しきり  
 二月のののありしと二月さえりて衣を更しきり  
 三月のののありしと三月さえりて衣を更しきり

衣更著	初月や汗よけき浪のおり	古登靴
中和節	初午や凍屋の門のり	古山
初午	初午や噴息の妙よ風のり	古噴風







列見やあらの花も白きし  
拙

列見やあらの花も白きし  
拙

吉野餅配

又餅配とも云ふ二月朔日藤原権規へ傳へる鏡を破  
碎し多くを奉りて又餅とて奉りて今日日本  
の餅は此の法に依りて又吉野山中の  
僧侶に傳へられたるなり

餅配の法に依りて奉りて又吉野山中の  
僧侶に傳へられたるなり

餅配の法に依りて奉りて又吉野山中の  
僧侶に傳へられたるなり

薪ノ能

滑芝能とも云ふ南都興福寺より七日より十三日迄あり七日の間  
雨降り六十四日迄時より上院の薪の余を毎火より薪水  
屋の内より積木を施す内急又薪の能といふ金春親世實生と別回  
堂の業も度々武より南都休暇の事定動也

二月目の能は焚き火の能なり  
思

二月堂の行ひ

南都より水を汲むは此の事を云ふ  
二月一日より十四日迄あり

遺教経

佛涅槃に入するに及ばずして此経を説く事世に有り九日  
より十五日迄北に釈迦を説くは此経を別傳に釈迦の名号  
を説く事あり(徒)子あり  
釈迦名佛といふ事也

佛の別

二月の佛の別は二月の佛・終る佛  
終る佛・終る佛

涅槃

山寺や修りて多しは終る佛  
古撰良

涅槃を云ふは終る佛の事なり  
古撰良

西行忌

舟玉の草あらしむ西行忌  
天竺風

嵯峨挂炬

十五日・興福寺常樂會(摺)十五  
日



積塔

二月十六日石塔塔の事(紀)音人者後醍醐天皇の集りて光春天皇の皇子雨夜の御子積塔會を催す(滑)滑世絶すゆふ又都鄙遠近の音者此を以て信了官位を以てむあり檢校勾當之

石塔や形目多あり衣障り  
芳州  
石塔會豆腐の名迄語りけり  
下廿  
有癖

春分節

社日

滑(滑)まき二月の中より翌夜まで(滑)まき  
時正あまのつひ  
春分のお後よ近き日の日也或は春の後に五成日之あま  
まのつひよ五成の神をまつる日あり(書)又つひ乙を  
は日ありまき

まきも寺の寺入りまき社日くれ  
お蒲  
細緞の定り昭まき社日くれ  
上廿  
由儀

臘月

治聾酒

年禮のおくま家ゆー社日くれ  
滑水  
春分よ新風名なまき社日くれ  
一  
降中々國土をまき社日くれ  
たのめ  
おのつ夜々霜まきやおれ月  
まき  
わのつあままきまの思まきや月繼  
まき  
まきまき川まき一繼月  
良  
家まのまきまきまの思まきや月繼  
左  
治聾酒や神寫も終るも品まき  
命  
不由

海(海)社日酒獨をのめ一年のまきを  
治聾酒



治神酒や飲とくもさるる事 花調

治神酒のきとを免る夜明け 市笠

治神酒やまの暇よりむすむ 風竹

治神酒や望の宴合子仲男入 正月拜

治神酒の果や味のかさのせり 子壽

### 社翁雨

提社の神舊水を食せまら社日必雨ふせり是を  
社翁の雨といふなり 禹社の神ハ辰申も勾結氏といひ  
共工氏の子あり水土を争ひ争つる故に社を争つ争り木を柱て  
社をせり夏より松殿より栢周の代より栗と備後より王者土を  
の土を封し社を建とり 候を

若くは社翁の雨はあつた 梅爰

ふかふか降る晴々社翁の日 下米裁

社翁の雨の素 栗店

### 圓宗寺寂暎會

十九日より廿五日まで  
延久五年に始る云々

### 天王寺聖靈會

廿二日聖徳太子の御忌日より天王寺まで法事  
あり終日俗人の拜あり

### 北野の御忌日

大昔天満天神の御忌日あり大昔祥渡より八幡  
あり菅原氏の御忌日云々

### 季ノ御讀經

或三月中より大梁まで  
おはまひあまひ

### 二日灸

隣りも志しぬ新あり二日灸 帰風

上りの雨のをれり二日灸 意

### 出代

二月八日あるは八月を後の出代と云は出代若江より  
二月二日を期し世より寛文八年御事あり三月昔に



あるより一編... 江戸... 二日又一統... ありの... ありけり

是の事もや出代の日教あり 是外

出代のお寺も名跡や 門の海 テハ 燈 燈

彼岸時正 増 ありとも... 都卒天の異... 八月は実

ある... 名を... 時正... ありの... あり

出代のお寺も名跡や 門の海 為 山

義経の橋も... 燈 燈

芝居 二の替 二の替... 下井 芳 院

二の替... 影 和

振... 転 和

皆人の... 酒 我

皆... 甘 茶

蛇穴を出 王子 如 仙

鷹化... 月 其 友

鳥の巢 下サ 其 隣

鳥の巢... 古 百 明



鳥の古巢

鳩らもきまの足中を以て古巢也

鳥 穀之

鳥 嘯

嘯のまろつてよ申うく産木より

翠葉

嘯くやふりゆく産の百より

子壽

雉子

・きり・野鷲 漢の長后の律を雉とてり此律を  
さけて其世よ雉を生鷲といへり

此をよ木まのまの雉子の産

菖山子

羽も産もふりゆく雨のきくま

殊産

あつたお雉子や粒糸のたゆり

唯風

若はり水も碎きき雉子の産

漁産

聞まゝ鳥

・雉子・鳩・河う山・朝鷹・鶯子  
まの宮よ雉子の雉を以て産まはる

・雉子・鳩・河う山・朝鷹・鶯子  
まの宮よ雉子の雉を以て産まはる

泊 狩

分入る星を繫やふり

右 鶯口

とふり狩を以ての産もはる

如 白

朝 鷹

朝鷹やえまのふりゆく

佳 音

緇尾鷹

鷹の尾は鶯の羽を  
緇くあり

是はまゆり白尾の産のりしる

右 白 燈

まゆりまゆり鷹の産尾より

右 葉 月

燕

・玄鳥・つる・め  
・白鳥・同巢







雲雀

引鈴や暮りの空をよみゆく  
 暮き雀や如く種を吐き麦の中  
 鈴の音は里やいしりよ遠き山  
 吹くまゆく暮き雀の鈴の音申ふ  
 心ゆくもそよそよかき残の鈴  
 吹くもや茅の鈴の引もせ  
 鈴の引音をよきよみゆく  
 引鈴や暮りの空をよみゆく  
 平細のいもいもや時をゆく

文里  
 賢外  
 弘潤  
 風竹  
 春禱  
 嶺風  
 臺長  
 貞忠  
 正帆  
 道

鶯琴

あけを連鈴うもるもや揚雲雀  
 雪のゆるしをよみゆく  
 柳中よ鈴あぬ川や時をゆく  
 鈴の音は里やいしりよ遠き山  
 吹くまゆく暮き雀の鈴の音申ふ  
 心ゆくもそよそよかき残の鈴  
 吹くもや茅の鈴の引もせ  
 鈴の引音をよきよみゆく  
 引鈴や暮りの空をよみゆく  
 平細のいもいもや時をゆく

儀友  
 香芸  
 如永  
 正帆  
 飛  
 新幹  
 嶺風  
 新南  
 花外  
 美望

駒鳥

あけを連鈴うもるもや揚雲雀  
 雪のゆるしをよみゆく  
 柳中よ鈴あぬ川や時をゆく  
 鈴の音は里やいしりよ遠き山  
 吹くまゆく暮き雀の鈴の音申ふ  
 心ゆくもそよそよかき残の鈴  
 吹くもや茅の鈴の引もせ  
 鈴の引音をよきよみゆく  
 引鈴や暮りの空をよみゆく  
 平細のいもいもや時をゆく



顔鳥

顔鳥の鳥や志をくく眼のおふ  
ハコトリ  
花よりこのわらうま  
あせりあおれ

泉鳥

泉鳥の鳥や志をくく眼のおふ  
ハコトリ  
花よりこのわらうま  
あせりあおれ

松尾鳥

松尾鳥の鳥や志をくく眼のおふ  
マツムシ  
花よりこのわらうま  
あせりあおれ

雀の子

雀の子の鳥や志をくく眼のおふ  
トモ  
花よりこのわらうま  
あせりあおれ

孕鹿

孕鹿の鳥や志をくく眼のおふ  
カ  
花よりこのわらうま  
あせりあおれ











出づるやまの山を呼ぶ 煙 カ 霧 シ  
 しらつやに注ぎをり 霧らふ煙式 春圃  
 水底の本花葉をうのり 煙う水 園山  
 井の底や世の毒もつるを呼ぶのまら 柳圃  
 亭傍くやうよ浮るる 煙う水 田菘  
 田よ呼ばるるよもあくや 初 煙 巳 隨  
 雲うらやう十分う呼ぶのまらうや 春久 隨  
 らしくと手足伸まや 浮 煙 占 同 外  
 眞珠のまのまのけを呼ぶ 煙う水 為 山

陽炎

・系遊と目物二名あり 春景地より昇るを陽炎或は二名  
 後ふをゆらぐ云升る空よりあき又降るを系遊とけし之

枯草やあつこく糸 煙中の一二寸 翁  
 陽炎のまらや 玉もる 舟のうら 仙  
 系遊よ牛の鼻息もきたり 山 方  
 けとあやまらうつ 物もあき煙うら 桃 五

系遊

猫の戀

・うのを猫・猫さるる・ねまのつよさる  
 ・妻のねま

物おもふをみるは けぬ男猫うれ かお 柳 風  
 見よををみるは けぬ男猫うれ ま 清 水  
 名のけをみるは けぬ男猫 花 園



うのそ 猫鈴とてしーこのさかて 住吉  
人の眼をまのさるるさー猫の魚 三交

諸子魚

諸子魚 湖水の魚あり長二三寸を限るを諸子魚と云ふ  
湖の水に魚あり其性何や多し湖の水は魚の肉は江西坂本より  
はれりとも何の氏魚最なり

水くさくさうふる目を浮くや諸子魚 仙月

子伸く新のやりのやうなるをくさくさ 左

鮎子取

鮎子取 鮎の子を名とす大さき尺ほどを鮎と云ふ  
下品あり其子他の魚より勝りて大粒なりを鮎と云ふ  
鮎の子を南都津津鮎鮎と云ふ最なり一網に  
枚方を獲ると云ふ

鮎の子を網や鮎と云ふぬを 山左

家うらまは鮎と云ふぬを 升左

煙

馬刀も出二三寸を指のめくさる貝あり又作煙と云  
何の貝も出ありや中をゆると云ふ

足えといふ貝をさるるや馬刀の穴 拙殊

何の貝も出ありや鮎と云ふぬを 桐左

寄居虫

波ひくさくさや寄居虫の遊むに交 殊左

ひく波もさるるや寄居虫の 川左端

田螺

うき時らう螺とい何の田螺 不二丸

茶山







初稻光

雨の降る時初霜をたのしみき 下カ 葉居  
 初霜や雪あふ 下カ 西我  
 初霜のゆくや イ 風付  
 初霜や イ 其致  
 初霜や 下カ 素月  
 初霜や 下カ 史紹  
 初霜や 下カ 龜友  
 初霜や 下カ 末有  
 初霜や 下カ 暮考

八重の梅

・初梅・雪中梅・夜梅・さくら梅  
 ・黄梅

紅梅

あつたのよき 下カ 玉 碩  
 紅梅の雨よ 下カ 為山  
 紅梅や 下カ 湖月  
 紅梅や 下カ 六探  
 紅梅の 下カ 曉月  
 接骨木の 下カ 花海  
 接骨木の 下カ 花有

接骨木の  
花



花を待

・初花・初さくら・彼岸桜・ふゆのさくら  
うさぎ桜・鬼さくら・あまさくら

待花のしづくよ川のさくらに

七井宿 如 成

初花

雪の日はさくらを待つては

七井宿 無

初花や咲くもさくら花

山子

初花やしる木は短き枝

鳥人

あつ人のさくらさくら

完 珍

あまのさくら日あけは

春之雄

飛鳥のさくら地やさくら

下志 和 南

取志のさくら木のさくら

為 山

初櫻

あまのさくら雨降るさくら

新 右

一花もあつてさくらさくら

下 南 山

一花を多枝もさくら

葉園女

過す日も思ふさくら

組 組

・玉のさくら・白玉桜・いば桜・飛入桜・さくら  
・二枝桜・つらね桜・川のさくら

さくらのおもひ

菊

四五本のつらねさくら

波 路

掃きよむさくらさくら

完 伍

さくらさくらさくら

工古 棠

椿







畑打

種場や芒の介も皆まきくろ  
畑打や家々のこをまきくろ  
余もまきくろ寺の男も  
古無村  
子妻

畑焼

こまきくろ  
こまきくろ

畑まきくろ作まきくろ  
新一羽  
上毛  
干針

田まきくろ

田まきくろ  
田まきくろ

田打

田打まきくろ日追存り今田面くれ  
畦風

苗代

苗代まきくろや名にの影おく苗代田  
苗代や水もまきくろ  
苗代

水口祭

苗代よ水まきくろ  
苗代よ水まきくろ  
まきくろ

苗代よ水もまきくろのおのせき  
苗代

建了退一水口祭  
影の笛

縄まきくろ水口祭  
草史

男よ入る水口まきくろ  
下井  
巻毛

家まきくろ水口まきくろ  
下毛  
梅左

水口のまきくろ  
下毛  
龜祐

種井

種井まきくろ  
下毛  
文種  
旭



種池  
種浸

四五割の家合と申す種井代 下五碩  
銘とよつとあるぬ種井くぬ 一米有  
土揚の家内出揃ふ種井く年 一五雲  
後中より初より月まで種井代 一季一  
任より家合のけしめ種井代 上廿由儀  
種池や初よりよふの水はく年 下廿梅左  
初より年より月より種ひく年 一俄友  
水の思ひぬく種を浸し 一季一 三月  
目もえくも病も殺す種ひく年 一用一

麻蒔

結人たあせせて種をひく一尾 一尾  
初より初より種を浸し 一尾  
庭掃や種あらしき日の同 一朝 完路  
麻おきや鄙くまききり年 一花  
麻蒔やもせく一尾 一尾 酒我  
麻蒔や初より終るをるあきり 一尾 彼月  
雪もくも種むくも初より年 一尾 霜  
獨活のまやふのまきも今志はし 一尾 峰  
防風や法もむも綱の初より年 一尾 峰女

獨活

防風



枸杞

馬鬣少く後し枸杞を搗せ危

上并 由儀

善いよふ似るを搗ね垣の枸杞

下并 玉碩

枸杞垣や蒼うと申す垣のよへ

、 米有

枸杞の馬よきをむ込るは味きん

、 方象

枸杞搗ね垣根つきのをくしひの

、 貞忠

之よ搗ね毒ハるふもあつくき

早并 葉居

枸杞つ出や朝日の白く垣はき

、 森史

山葵

如 白

杉菜

おあつらの畑に根をき杉菜葉

葉居

草芳

此草も伸る花弁の枝葉うね

下并 龍成

似る色の枝葉も伸ぬ麦の如

下并 龍成

伸る草もやき波地の枝葉

下并 優

目を通る花や芳き草の色

下并 専志

芳しき草もあつる草の字

下并 葉居

四方にれ毒あつる草の芳き

下并 葉居

ちんちんも味ハあつる馬草

下并 葉居

あつる草も味ハあつる草の

下并 葉居

草の若葉

あつる草も味ハあつる草の

下并 葉居



菊の若葉

余のさうとちや心め菊の若葉は

仙月

葛の若葉

枯葉とあらし一葉よその葉もれ

祐之

萩の若葉

をけり名をせんふ萩の若葉は

菊

蕨

早のい・うき蕨

草

ふ蕨やははしく望る山もえき

為山

うるはしく焼くよきまきこもいふ

仙友

狗脊

狗脊の綿よこや日如風

唯風

唯風の狗脊提へ通る岸り

唯堂

狗脊のちりよきるやあちい

中後

せんよの水よおるよは海うらま

子古棠

狗脊や越ぬハ山の多ハ

暈水

せんよの海へ出さう唯大のた

一山

狗脊の綿もあける南東風ハ

子布

角細芦・芦の角・芦維

はさろや角もむ芦よけぬ水

佛孫

何の角もむや川原のたもり

智幽

はさろ角もむ芦のまもり水

定英

あのと近ゆき川や芦の角

伊山







蓬摘

信濃路のむらさきの中 下毛 葉飲  
種よくてぬくの葉の色よくぬく、優  
ゆきよくて葉は赤く名もやき

糠父

葉よく葉の地まよ通ぬ蓬つと

下サ 方泉

うらさをまつとるや蓬摘

下毛 優く

韭

種よくて葉もや葉よくて葉よく

合

厚くても葉よくて葉よくて葉よく

ハッ 智幽

野蒜

砂地よく根入のやき種よくて

タシ 不二丸

寺子等をこぼすつとて種よくて

如水

葉よくて葉よくて葉よくて葉よく

樹伴

人よくて葉よくて葉よくて葉よく

下毛 優く

葉よくて葉よくて葉よくて葉よく

下毛 泉成

胡葱

胡葱も葉よくて葉よくて葉よく

麦系

葉よくて葉よくて葉よくて葉よく

瑞英子

葉よくて葉よくて葉よくて葉よく

下毛 魚欣

葉よくて葉よくて葉よくて葉よく

上毛 牧雄

大根花

種よくて大根もよくて葉よくて

サカ 具和

草摘











中領城郡

石塚村

高井郡

櫻澤邑  
里

知三堂